校長室だより

２０２３年２月１７日
校 長　小崎（こさき）　功二（こうじ）

学校 HP

無知の知

「無知の知」は，「 自らの無知を自覚すること 」が大切であることを説く言葉です。古代ギリシアの哲学者・ソクラテスが説いた真理探究の基本になる考え方で，ソクラテス哲学を特徴づける有名な言葉ですが，私は哲学を学んでいませんし，哲学的な深い意味合いを説明できる力量もありません。それでも今回この言葉を紹介したいと思ったのは，教育者として，学校として，心に留めておきたいと感じることがあったからです。

私は新任として赴任した小学校で，陸上練習を指導中に左膝を負傷したことがありました。骨折まではいかなかったものの，膝関節の靭帯損傷で，暫くは松葉杖の生活を送りました。

その地域には町の中心部に町で唯一の総合病院があり，その病院で診察を受けた際，医師から，「レントゲンで骨に異常はなく，軽い打撲だと思うので，湿布を貼って様子を見ましょう。」と言われました。ところがその夜から膝が熱を持って腫れ上がり，激しい痛みが襲ってきたため，翌日改めて同病院を受診しました。その際，医師は改めて，次のようにおっしゃいました。

「私は外科の専門医ではない。」

「このような腫れや痛みの原因が，私では，はっきりとは分からない。」

「靭帯や関節損傷の疑いもあるので，すぐに専門医を紹介する。」

翌日，左膝はますます腫れ上がり，紹介された専門医にタクシーで向かいました。そこで診察後すぐに膝に溜まった水を抜く処置を受け，ギプスで固定されました。専門医からは，「できればもっと早く処置をすべきだったが，手遅れにならずに済んで良かった。」という話がありました。

当初，ただの打撲と診断した医師が，その後の経過を見て変化を見逃さず，すぐに専門医を紹介してくださったために靭帯損傷が判明して，適切な治療を受けることができました。

多くの地域住民がまず受診するその総合病院では，医師は風邪から怪我まで，日々様々な患者を診察していました。私がただの打撲ではなく靭帯損傷だったように，風邪を引いたと思って受診する患者の中に，重篤な病気が隠れている場合もあるでしょう。そんな診察の日々の中で，その医師は常に患者の様子を注視してあらゆる可能性を視野に入れながら，さらに自分の知識や能力を過信することなく，診察や診断にあたっていたのだと思います。

自分の専門外であったり自分の知識や経験では対応できないことがあるとき，「自分で何とかしなければ」「自分だけで解決しよう」と思うのは，一見責任感が強いように見えますが，そうではありません。医師の場合，真に患者のことを考えれば，迷わず専門医を紹介することが責任ある対応であり，その判断が，時には生死を分けることにもなるでしょう。

医師に限らず，自分を客観的に見つめて自分の限界や力不足（無知）を自覚し，その上で，専門家の力を借りたり改めて調べてみたりする姿勢は大切です。

日々，多様な教科領域について指導している私たち小学校教員は，子供たちの学びにとって，最初の重要な窓口です。そのような立場の私たちが指導にあたる際には「無知の知」を自覚することが重要です。本物に触れる機会（体験活動・見学等）の提供，専門性を持った外部講師や地域人材，適切な資料の活用，校内での組織的な対応等，個々の個性や特性に応じて子供たちにとって最適な学びを保障するために，謙虚で責任ある対応を心がけながら，子供たちと共に学ぶ姿勢を大切にして参ります。

切 り 取 り 線

子供たちのための，意見・提案・要望・校長に知らせたいこと　など

2023 年 2 月 17 日（　）年（　）組 児童氏名

※メールでも随時受け付けております。kosaki-k@sendai-c.ed.jp（校長直通）